

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	濱谷真理子
論文題目	出家と世俗のあいだを生きる —現代インド・ハリドワールにおける女性行者の民族誌—		
(論文内容の要旨) 本論文は、北インドの巡礼地ハリドワール郊外で暮らす女性行者の民族誌である。出家者でもなく在家者でもない「家住行者」としての彼女たちの日常的な修行生活を明らかにすることで、インド社会における出家と世俗の関係を女性行者の観点から再考する。 第1章では、調査地であるハリプル・カラーン村（以下HK村）とハリドワール市サブタ・サローワル地区（以下SS地区）の概要を記す。住み込み調査を行ったハリプル・カラーン村（以下HK村）はもともと静寂な修行場だったが、現在では大規模な修行道場が立ち並び行者たちの個人住宅が林立する場へと変容している。 第2章は、女性行者たちの社会的な位置付けについて、宗派組織や修行道場との関連またHK村社会での暮らしを中心に記述する。伝統的な宗派組織と1980年代以降に設立された新興教団のどちらにおいても、女性行者の多くは周縁的な立場に置かれ、家事や雑務を担わされるだけでなく外出や人間関係などを制限される。そこで、宗派組織からも修行道場からも離れて暮らすことを選んだ女性行者たちは、男性パートナーや馴染みの女性行者たち、血縁親族などとともに、あるいは単独で、それぞれ「庵」を設けて地域社会で暮らしている。このように出家と世俗の中間領域を生きる女性たちが「家住行者」である。 第3章では、女性行者たちが地域の行者共同体に加入し、適応していく過程について、施食会での共食儀礼の実践に着目して記述・考察する。HK村とSS地区の多くの行者たちが毎夕集まる施食会への参加を通じて、女性行者たちはその地域におけるあるべきふるまいかたを身につけていくのである。 第4章では、女性行者のあいだでの、施しの贈与や分配の活動について考察する。行者社会の序列に従う男性行者に対し、女性たちはさまざまな人間関係のネットワークを活用して、贈与や分配に与ろうと試行錯誤する。その一方、仲間内での相互協力や軋轢をめぐっては、女性たちは他者への慈愛や配慮を重視し、分け与えるという実践を通じて、贈与関係に内在すると考えられる危険を慎重に回避しようとしている。 第5章では、沐浴場における集団托鉢実践を検討する。男性行者は托鉢集団をつくって組織的に托鉢を行うのに対し、女性たちの托鉢集団は結成されては立ち消えになることを繰り返してきた。女性たちは、女性同士の団結や托鉢の実利よりも、しがらみからの離脱や自己の居場所を確保するための自由を模索しているのである。			

第6章では、女性行者の男性パートナーとの同居生活に着目し、禁欲主義について女性行者の観点から再考する。禁欲主義は男性的観点から構成されたイデオロギーであり、行者社会におけるジェンダー・ヒエラルヒーを支持し正当化する言説の一つとして機能してきた。ただし女性とともに暮らすことが男性行者に忌避されるのに対し、女性行者たちにとって男性パートナーとの関係は必ずしも否定されるわけではない。男性視点では身体的禁欲が重視されてきたのに対し、女性行者は奉仕実践を通じた情緒の制御を重視し、独身の形式にとらわれず積極的に世捨てと家庭生活の両立をはかろうとしている。

第7章では、女性行者たちの葬礼について考察する。行者の死に際してどのような死者儀礼を行うかは、男性行者の場合は一般に、所属セクト内の修行階梯を基準として決定される。しかし、女性行者の場合、同居人、隣人、馴染みの女性行者や、遠方の親族など、身近な人びとが議論し決定した形で、儀礼が執り行われる。親族の意向で、家住者として火葬にする場合もあれば、世捨て人として水葬/土葬する場合もある。女性行者にとって、世捨て人であるかどうかは、必ずしも理念的枠組みや行者社会の規範で裁定されるのではなく、身近な人びとや親族などの意向に左右される。逆にいえば、親密な他者とのつながりを肯定し育むことが、世捨て人であったということの承認へと通じるのである。

結論では、これまでの議論をまとめている。完全な世捨て人とも家住者ともみなされない女性家住行者が、行者として評価されたり、世捨て人として承認されたりするのは、親密な他者とのつながりにおいてこそであった。そのなかで女性家住行者たちは、他者との親密な関係を築きながら同時にそれにとらわれない世捨ての態度を通じて、出家と世俗のどちらにも安住しない自己の生き方を構築しようとしている。

(論文審査の結果の要旨)

従来のインド行者研究は男性行者を扱うものが中心であり、女性行者を扱う場合も僧院組織に属するものたちをとりあげるものが多かった。その結果、世俗的関係の否定においてこそ修行生活は可能になるという考えを前提とし、禁欲主義にもとづいて女性を周縁化する男性中心的な視点からの行者社会の理解が主流であった。それに対して本論文は、宗派組織や修行道場から離れ、自分の庵を持って、男性パートナーや女性行者仲間や血縁者などとともに生きる女性家住行者に着目する。そこでは、地域社会に暮らす女性家住行者たちの視点から、これまでの単純な出家主義や男性中心主義を相対化するような修行生活のありかたが描かれている。

本論文は、2009年3月～4月、2009年10月～2010年3月、2011年2月～3月に行った予備調査および語学研修を経て、2011年8月～2013年3月にかけて行われた約2年半の本調査にもとづいている。調査の過程では申請者自らがグルのもとに入門し、ハリドワール郊外にて家住行者としての修行生活を送っている。本論文は、このような申請者の経験と観察にもとづいた、女性家住行者社会についての親密で奥深い理解に支えられている。

本論文の学術的な意義は、以下の3点である。

第一に、これまで十分に注目されてこなかった女性家住行者の存在について指摘し、その社会の成り立ちと暮らしおよび修行生活について、長期の参与観察にもとづく綿密で詳細なデータを提供したことである。女性家住行者について包括的かつ詳細にとりあげた研究は国際的にも唯一であり、高く評価される。

第二に、女性家住行者社会についての深い理解と緻密な観察に基づき、民族誌的に厚い記述をなすことに成功していることである。本論文によって、現代インドに生きる女性家住行者たちの暮らしとその意味世界の豊かさが、学術的にはじめて明らかにされた。これは申請者自らが女性家住行者として共に長期間暮らすなかではじめて可能になったものである。特に、出家と世俗、放棄と慈愛、たちきることとつながることなどの矛盾と重なり合いのなかでときには悩みつつ、しかし自らの生のかたちを生き抜こうとする女性家住行者の立ち位置と姿勢を活写したことの貢献は大きい。

第三に、インド行者研究において、女性家住行者の視点から、従来の男性中心主義的な禁欲主義や出家主義を相対化する枠組みを打ち出したことである。女性行者たちは、さまざまな社会関係や制度に依存しなければ生きていけない自らの立場を認識し、束縛からの自由を欲しつつ、地域社会で自らが生きられる場を確保しようとする。そして他者との関係を放棄するのではなく、むしろ親密な他者に対する自らの行いを慈愛や奉仕として追求することで、社会関係を、執着やしがらみの原因ではなく、あるべき自己を構築していくための資源へと転換しようとするのである。これは、現代インドにおける宗教や修行生活について新たな視角を提供するものであり、女性家住行者の修行生活を理解するにあたっ

て有用であるだけでなく、僧院や家庭にあって宗教的探求をなす人びとについてより多元的に深く理解するためにも有効な視座であるといえよう。

以上のように本論文は、出家と世俗のあいだを生きる女性家住行者の修行生活を、その微細なひだにまでわたって緻密に描き出すことによって、現代インドの宗教と社会についての新たな理解を示したきわめて優れた研究である。それは南アジア地域研究および宗教研究に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年6月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。